鹿大広報

No.149
Feb/1999

編集・発行
鹿児島大学
広報委員会

特集：未来への道

目次

■特集　未来への道

送別の辞 …… 学長　田中　弘允…… 3

卒業・修了にあたって …… 4

天辰美智代（法文）　奥田　純一（法文・院）　田渕　和恵（教育）
岩越　悟志（教育・院）　上南　　裕（理）　岡田　守道（理・院）
椿松　昌彦（医）　四元　剛一（医・院）　若松　愛子（歯）
廣森　健二（歯・院）　中田　舞子（工）　上田　和成（工・院）
池上　知成（農）　原口　裕幸（農・院）　橘　　明裕（水産）
山本佐智夫（水産・院）　久永かおり（医短）　堀川　香織（医短）
宝力　朝魯（教育・院）　ノルシダ　マン（農・院）

退官にあたって …… 9

松本　　譲（法文）　山下　國誥（法文）　高松　敬吉（法文）
荒川　　譲（法文）　一柳　宣男（教育）　美坂　幸吉（教育）
北川　茂治（教育）　東　　四郎（理）　米原　範伸（理）
津金澤督雄（医）　松下　敏夫（医）　酒匂　　宗（医）
吉村　　望（医）　平　　明（医）　大井　好忠（医）
末田　　武（歯）　徳廣　育夫（工）　伊藤　士郎（工）
田邊幾之助（農）　田中　實男（農）　関岡　幹尚（水産）
田尻　英雄（附属図書館）　永吉　孝文（工）　榎木　　實（水産）
前畑　房代（教育）　鳥入　佳輝（医）　取附　光徳（医病）
岩下　弘子（医病）　稲元　忠弘（水産）

■学内だより

○郡元地区学内交通の現状と課題…… 郡元地区交通委員会委員長 …… 守田　和夫 …… 17
○随　　想…… 野球と私 …… 理学部 …… 新森　修一 …… 18
今世紀最後の年の、「初夢」 … 補導協議会委員 …… 坂田　祐介 …… 19
○保　　健…… 対人恐怖症 …… 保健管理センター …… 森岡　洋史 …… 20
○留学生日記…… Learned From Japanese …… ディナル　チャトル　イスティヤント …… 21
Life and Experiences in Kagoshima …… サルバドール　アービン …… 21
○研究室紹介…… 環境情報科学講座 …… 水産学部 …… 市川　　洋 …… 22
○サークル紹介… 学友会（管弦楽団・陸上競技部）…… 23
○新任教官紹介…… 24
○図書館だより…… 26
○編集後記…… 26

表紙デザイン

城山から見た夜明けである。写真をベースとしたコンピューターの画像処理によりインパクトのある昇る太陽を協調した。

教育学部 教授 美術教育講座 梅田　晴郎

特集　未来への道

送　別　の　辞

学　長　　田　中　弘　允

田　中　学　長

今年も春の訪れと共に退官される教職員並びに卒業生の皆様をお送りする時がやって参りました。残る私どもにとりましては惜別の情しきりでございますが、皆様にとりましては新しい世界へのスタートであります。共に過ごした日々を想い、そこでなしとげたことを確認し、明日からの新世界への糧にしたいと存じます。

このたび退官される皆様は、教官あるいは職員として勤務され、教育、研究、診療、大学運営等に大きな努力を払われ、本学の発展にすばらしい貢献をされました。皆さんの御努力に心から感謝申し上げます。

鹿児島大学は、昭和24年創立以来50年間６万名余の卒業生を社会へ送り出し、また、一流の研究成果をあげ、地域社会や国際社会に大きく貢献してきました。そして、1997年４月本学始まって以来の大きな改革が行なわれ、一貫教育制の導入と教養部の改組・転換並びに各学部の改編充実が行われました。また、1998年４月には、理工学研究科、人文社会科学研究科、教育学研究科の音楽教育専修及び美術教育専修が設置され、大学院の整備がなされました。さらに、1998年10月には、医学部保健学科が設置されました。現在は、これらの改革に魂を入れる作業に全力をつくしています。

わが国の行政改革の一環として提出され、1997年秋に落ち着いたとみえた国立大学の独立行政法人化の問題が1998年秋に再び行革本部などでとり上げられましたが、結局2003年迄に結論を出すことにほぼ決まったようであります。

このように重要課題が提起されましたので、教職員の皆様に大きな御苦労をおかけしましたが、本学は皆様の豊かな経験と指導により危機を乗り越え、発展を続けることができました。

私どもは、21世紀への架け橋となるこの時期に、充実した教育、世界的研究を通して社会に貢献するために努力いたします。どうぞ、学外からのよき批判者、協力者として御指導くださいますようお願い申し上げます。皆様におかれましては、健康に留意されて明日からの新しい生活を充分に楽しまれますよう心からお祈り申し上げます。

平成10年度卒業生の皆さんは、永年の御努力の末ここにめでたく卒業されることになりました。御家族や関係の方々と共に心からお祝い申し上げます。

皆さんは、すばらしいキャンパスとそれをとりまく情緒豊かな鹿児島の地で、学問、スポーツ、市民との交流、その他社会活動を通じて多くのことを学び、身につけました。その結果、新しい事態に対応できる能力を獲得されました。皆さんが明日から参加する社会は、今激動の中にあります。それは今世紀の総決算であり、輝かしい21世紀への準備でもあると思われます。21世紀はまたグローバリゼーションが更に進み、皆さんの活躍の場は全地球いや宇宙にまでも拡がることは明らかです。

自らのアイデンティティを確立し、激動の世界を自信をもって前進し、自らの夢の実現に向けて挑戦して欲しいと思います。

さて、社会人一年生の皆さんは今後永年に亘って社会へ貢献するわけですが、是非実行してもらいたいことがあります。それは望ましい生活習慣を今から作り上げることです。ここでいう望ましい生活習慣には、まず、心身の健康を保つためのものがあります。その中には、規則正しい生活、バランスのとれた３度の食事、適度な運動、充分な睡眠、ストレスの発散などが含まれます。次に、自分自身のための自由な時間を毎日もつことです。そして、自分の時間の一部を、考えること、哲学することに使う習慣を作ってもらいたいと思います。

最後に、退官される教職員と卒業生の皆様の御健康を心から祈念して送別の辞といたします。

特集

卒業・修了にあたって

天　辰　美智代

■卒業にあたって

卒業にあたって４年間を振り返ってみると入学した頃がついこの間のことのように感じられる。私はこの大学で多くの事を学び、得ることができた。

特に私にとって有意義であったことは自分の育った鹿児島や、自分自身を見直すことができたことである。入学する前の私は鹿児島に対して無関心で、特別な感情を持っていなかった。こんな私が鹿児島を「自分の故郷」と考えることができるようになったのは「方言」と出合ってからである。多くのお年寄りの方と話をしてみて鹿児島の良さを感じ、同時に自分の内面を見直すことができた。このように内面的に充実した時間を送り、成長することができたことは、これからの私にとって大きな財産になるだろう。

社会にでれば、今までとは違い多くの困難が待ち受けていることだろう。しかし、ここで得た財産を十分に活用して頑張っていきたいと思う。

（法文学部人文学科4年　**天辰美智代**）

奥　田　純　一

■修了にあたって

私が法学研究科に進学したのは、高等学校の教員になるためでした。

学部４年の春、教育実習で「教える」ことの喜びを知り、教員になることを決意したものの、準備が足りず結果は不合格。民間企業の内定も既に辞退していたため、進路を教員一本に絞り大学院への進学を決意、紆余曲折を経てなんとか進学することができました。

院では「学校事故と法的責任」について研究し、同時に教員採用試験も受験。昨年、受験回数通算３回目にしてなんとか合格、今年から県内の高等学校で公民科の教員として働くことになりました。

大学院は今年で終了ですが、自分の研究はまだ始まったばかりだと感じます。教育現場に飛び込んだら、そこでまた新たな発見があるでしょう。別の角度から物事を考えることもあるでしょう。学生から現場の教育へと立場は変わりますが、これからも自分の研究を煮詰め続けていきたいと思っています。

（法学研究科2年　**奥田　純一**）

田　渕　和　恵

■私の大学生活

どうやら神様は、人間を同じように作っていないようです。私たちが持っている体や顔、人格や能力はまったく違ったもので、自分以外の自分は誰もいないのもそのためです。

一方、私たちに同じだけ与えてくれたものがあります。

時間です。ただし、時間は一方通行で、いくらがんばっても過去に戻れないという条件つきです。

私たち大学生のもつ最大の特権は、人生において、自分で料理できる時間を、たっぷり与えられていることだと思っています。

私は、限りある時間の中で、さまざまな人達に出会いました。出会いの中で、たくさんのことを学びました。そこから、新しい自分に出会うことができました。そして、自分を磨き、自分の与えられた能力を伸ばすこともできたのです。

そういった意味で、私は、自分らしい最高の大学生活が送れたと思います。

（教育学部小学校課程4年　**田渕　和恵**）

岩　越　悟　志

■教師と研修

現職の教員として鹿児島大学大学院で研修ができたことを多くの方々に心から感謝しています。15年ぶりに受けた講義はとても楽しく、現場で経験してきた教育実践と深く結びつき、教育理念の再認識と教育の基本理論の再発見をすることができました。

教育現場には様々な個性をもった子供がいます。一人一人の子供のよさを見つけ、どのように生かし、伸ばしていくかが教師の課題です。そして、少しでも目的を達成できれば、教師としての喜びとやりがいが湧いてきます。この大学院の研修は、教師の課題を解決するために多くの示唆を与えてくれました。さらに、教師になろうとしている学生たちと接することで、教師になった頃の初心を思い出しました。今、一日一日の学校生活をより一層充実して過ごしています。

大学院の研修で学んだことを、さらに、教育実践に生かし、これからも研究と修養に努めていきたいと思います。

（教育学研究科2年　**岩越　悟志**）

特集

上　南　　裕

■卒業にあたって

大学の講義は新鮮でした。語学学校に払うお金をもたない私は外国語をいくつも採り、独語が縁となって「ドイツ語とドイツ文化研修旅行」に参加させて頂きました。その中で他学部・他大学の学生・先生方と知り合え、独語圏の人々と交流できたことは貴重な体験でした。専門の数学は実に魅力的で、夢中になりました。「この様に定義して何が嬉しいかと言うと…」や「せめてこれが成り立ってくれないと寂しいぞ」といった先生の呟きを聞くと有頂天になったものです。大量の計算用紙に取り囲まれ、あるいはチョークの粉で真っ白になりつつ、予想間を論理式で埋めて証明を終えた時、その愛すべき性質が自分のものになったと感じ、無上の喜びで満たされました。普通ならば耐え難いはずの度重なる新しい概念の導入も、いとしいマノンのためなら、少しも苦にはなりませんでした。

お世話になりました多くの皆様、特に掃除のおじさん・おばさんに感謝しています。

（理学部数学科4年　上南　　裕）

岡　田　守　道

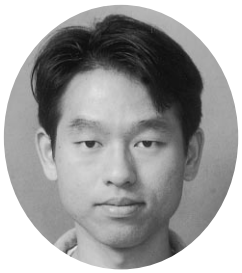
■修了を迎えて

親元を離れ、一人暮らしを始めて早５年が過ぎた。大部分は気ままな生活だったが、病気のときなど、あらためて身近にいた親の大切さを感じると共に、自分のことを考えてくれている友人のありがたさなど、一人で暮らしてこそはじめて考えたことも数多くあった。また、一人で暮らしていた無限の時間の中で、これからの自分について真剣に考えることができたのもとても有意義なことだったと思える。

大学院での２年間は本当に研究漬けの日々だった。マイペースな自分を暖かく見守って下さった講座の先生方にはとてもお世話になった。深く感謝しています。

終わってみれば短いと感じられるが、この６年間の間にいろいろなことがあった。いろんな人との出会いをはじめ、自分のこれからの人生にとってかけがえのないものを得られたと思う。この経験、目に見えない財産を今後の人生に生かしていきたいと思う。

（理学研究科2年　岡田　守道）



椿　松　昌　彦

■卒業を前に

不景気が続き、苦しい経営を強いられているにもかかわらず、物やサービスには恵まれている今日、医学界においても一般市民からの要求は高く、通り一辺倒ではなく、より安くより質の高い医療が求められているように思う。こういう時代に卒業する私達は、これから医師としてどうあるべきなのだろうか。

これまでの医療においては、患者が受け身的な存在になりがちで、その意志が反映されず、医師による一方的な医療が行われることも少なくはなかった。これからは、医療も歴としたサービス業でなくてはならないと思う。もちろん主役は患者である。ジュネーブ宣言にもあるように、医師は生涯を人類に奉仕し、患者のために誠実および全力を尽くす義務があるのである。患者を我が肉親と思い、尊敬といたわりの精神で医業を成し得れば、きっと良い未来がみえてくるのではないだろうか。

（医学部医学科6年　椿松　昌彦）

四　元　剛　一

■修了にあたって

私は平成２年に本学を卒業、第二外科で外科の臨床研修を行い、外科認定医を取得した後、平成７年４月に、本学大学院医学研究科第二外科学講座に入学し、心臓リンパ、心保存、心臓移植をテーマに犬を用いた実験に取り組んできました。病棟医としての業務（二外科の病棟医は信じられないぐらい忙しい）もこなしながらの研究生活となり、実験中ポケベルで病棟に呼ばれ、手を下ろすこともしばしばでしたが、平教授をはじめ数多くの先輩方や同僚達に支えられ、一緒に大学院生となり苦労をともにした山岡君とともに、何とか実験を終了することができました。心から感謝しています。また、設備のたいへん充実した動物実験室で、犬の麻酔をはじめいろいろと教えていただきました上村先生、本当にありがとうございました。これからもお世話になった方々への感謝を忘れずに、さらに心臓外科の臨床にまた研究にがんばっていきたいと思っています。

（医学研究科4年　四元　剛一）

特集

若　松　愛　子

■卒業にあたって

６年間という長い大学生活もいよいよ終わろうとしています。振り返ってみると、押し寄せる試験と厳しい実習に追われ、常に全力疾走を続けた、あっという間の６年でした。

少しずつ専門分野について学んでいくにつれ、もっと勉強したい事、やりたい事が増え、将来の夢は膨らんで行くのに、いざ就職という局面に立たされると夢と現実の間で自分の未熟さを痛感し、不安や焦りを感じました。

そんな中で自分が進むべき道を選択する助けとなったのが多くの先生、先輩方の暖かい御指導であり、友人達の励ましでした。この大学で友人達と共に支え合い、多くの楽しい時を過ごせたからこそ、私の大学生活はこれほど有意義であったのだと、この出会いに感謝しています。

これからも、このように素晴らしい出会いを期待しつつ、次なる目標に向かって新たなる一歩を踏み出したいと思います。

（歯学部歯学科6年　**若松　愛子**）

廣　森　健　二

■「一後・一得（いちごいちえ）」

修了は、新たな始業の一通過点であると思いますが、スムーズに達成できることもあれば、「紆余曲折」の末「やっと・・・」と言うことも有りました。ふと振り返ると、入学から修了までの間、多くの人々に、助け・支えられたことを痛感します。入学したての頃「右往左往」していた私に講座の先生方は、物事に対する柔軟な考え方と、あるいは、一つの事に「堅忍不抜」の姿勢で臨むことも教授して戴きました。実験のイロハから始まり、一つの実験を遂行した後（一後）、結果を論文で出す機会を得ること（一得）が出来ました。何事に対してでも、取り組み方が「一心不乱」で真摯であれば、善し悪しに関わらず一つは結果が出ると言うことを実感しました。これから私は新たな一歩を踏み出します。たとえ徒労に終わっても、人との「一期一会」を大切にし、自分への「一後・一得」が出来る様に、肩の力を抜きつつ、「臨機応変」に頑張って行きたいと思います。

（歯学研究学科4年　**廣森　健二**）

中　田　舞　子

■卒業にあたって

振り返ってみると私にとって大学生活、特に４年のときの１年間は、大げさかもしれませんが、今までの人生において最もつらく、しかし充実していたときでした。

３年の２月末に、できたらラッキーと思っていた他大学の大学院進学が具体的に挑戦できることを知ったのです。そして、その後の地獄のような半年間の始まりでもありました。手渡された問題は、難しいというより未知の世界でした。それを１つ１つ質問したり、調べたりして自分のものにしていきましたが、あまりにも難しく、自分の処理能力をはがゆく思い、この道を選んだ自分を呪う毎日でした。それでも合格を手にすることができたのも、気持ちが下がらないように励ましてくれた家族、友人、先生方そして研究室の方々のおかげだと本当に感謝しています。

４月からは一人暮らしが始まります。大学生活で痛感した努力や人との出会いを大切にして、これからもがんばっていきたいです。

（工学部機械工学科４年　**中田　舞子**）

上　田　和　成

■修了にあたって

大学院に入学して２年、大学入学から数えると６年が過ぎようとしている。小・中学生の頃には大学に行くなんて思いもしていなかった私が大学院まで進学したことには、我ながら驚きである。

私が大学に入学した当初は、機械工学に対して機械工学＝エンジンといった程度の認識しかなく、ましてや私の所属する研究室で取り扱う流体工学など知る由もなかった。ところが、この６年間で機械工学のきまざまな講義を聴講し、その幅広さを目の当たりにすることで私の認識は大きく変化し、現在では以前にも増してかなり魅力的なものとなってきている。たった一つの分野ではあるが、機械工学の奥深さ、難しさを知り得ただけでも私にとっていい経験であったと考える。

最後に、この学生生活において自分がどれだけ成長できたかは分からないが、これまでに得た僅かばかりの知識や経験が社会に出て少しでも役立つよう頑張って行きたい。

（理工学研究科２年　**上田　和成**）

特集

池　上　知　成

■大学生活を振り返って

　私は今年大学生活を終えようとしている。振り返ると長いようで短かったなという心境だ。私が入学したのは平成７年４月、ちょうどオウム事件が騒がれていた頃だ。

　私は入学当初怖かった。今考えればまだまだ甘い学生生活だが、社会にいきなり放り出された気がしたからだ。

　しかし私は少しずつだが分かり始めた。自分を動かすのは自分であり、学問をはじめ、大いに自分の思うように行動できる。しかし自由の裏には必ず責任が伴うのだと。それから私は「自分自身」の為に授業を選択し、本を読み、大学生活を営んでいった。幸いにも私は多大なる時間を頂き、書を読み、旅行にも行って自分の価値観を広げたり、さまざまな資格も取得することができた。

　卒業後私は東京で就職する。さらなる自由と責任のもと、恥ずかしくない社会人たる生き方をしたい。ありがとうございました。

（農学部生物生産学科4年　**池上　知成**）

原　口　裕　幸

■修了するにあたって

　大学に入学してから学部４年間、修士２年間の計６年の歳月が過ぎようとしています。その中でも家畜管理学研究室での４年半は生涯忘れることのできない想い出を作ることができました。同研究室に所属する私は、日常の家畜飼養管理、卒論および修論研究を通して数多くの生産現場（農家）の方々と関わってきました。研究や作業を行う中で様々な農業技術を身につけることができましたが、それ以上に自分自身数多くの社会勉強ができたと思います。研究室入室当初は精神的にも肉体的にも未熟であった私ですが、先生方や先輩方、後輩その他様々な人々に支えられ、どうにかここまでやってくることができました。本当に感謝しています。これから私は社会に出て民間企業で働くわけですが、様々な困難が待ちかまえていると思います。さらに自己を磨き、向上心をもって一生懸命頑張っていきたいと思います。

（農学研究科２年　**原口　裕幸**）

橘　　明　裕

■卒業するにあたって

　入学後、今まで経験した事が無いほど、多くの人々に出会い、その一員として行動してきた。私は人付合いが苦手で、大なり小なり摩擦を起こすのだが、この頃それが以前ほど苦にならなくなってきた。というのも、人のどんな行為でも、それが正しいか否かは結局今まで生きてきた価値観で判断するしかないし、それがそっくり他人に当てはまることはありえない。だから最近では、他人に何か自分の価値観を求めるのは無駄であり何の進歩も無いように思えた。同時に、変化するのは自分本人であって他人ではない、と考えれるようになってきた。何処かの僧が、他人にすがるのではなく、大切なのは自分の行いだ、と言ったらしい。他人の意見や無意味とも思える倫理などが世の中には沢山ある。だがそれらに影響されても、それを鵜呑みにしたり、または縛られるのをやめようと思う。そして、自分の行動だけは納得できるようにしていきたい。

（水産学部水産学科４年　**橘　　明裕**）

山　本　佐智夫

■修了にあたって

　私が鹿大に入学してから早いもので６年が過ぎようとしている。正直なところ水産学部に入学したものの最初の３年間は特に興味のある学問もなく、講義もなんとなく受けていたような気がする。しかし、４年生のとき卒論を通して初めて研究の楽しさと充実感を味わった。そのとき私は大学院に進んでもっと研究を続けてみたいと思う反面、友人たちが皆就職していくのに焦りを感じていた。進学か就職か悩む私に母が「長い人生の中のたった２年間、悔いの残らないように好きなことをしなさい。」と言ってくれ、進学を決意した。そして今年無事に修了をむかえるにあたってあのとき進学してよかったと心から思える。100％満足いく研究ができたかというと満足はしていないが充実した毎日が送れ、悔いは残っていない。そして、進学を許してくれた母や、学ぶ機会を与えてくださった先生方をはじめ私を支えてくれた人たちに深く感謝したい。

（水産学研究科２年　**山本佐智夫**）

特集

久　永　かおり

■卒業にあたって

助産婦になりたいと希望し、専攻科に入学してから早１年が過ぎようとしています。過ぎてしまえば早かったとしか言いようがないのですが、専攻科での１年は流水のように目まぐるしく過ぎ去ったように感じます。

最も記憶に新しいのは、臨床での実習体験で、言葉にできないほど多様な経験を積むことが出来ました。しかし、その分だけ苦労を重ねなければなりませんでしたが、皆で励まし合い教官の先生方に支えていただきながら無事乗り越えることが出来ました。この経験は、助産婦になる上でも必要ですがそれ以上に、自分自身の人間性を磨くために必要な事だったのではないかと思います。

卒業を目前に控え今思うことは、無事国家試験を受け卒業の日を迎えられるように努めて、それをお世話になった教官の先生方に対する恩返しとしたいと思います。

（医療技術短期大学部助産学特別専攻　**久永かおり**）

堀　川　香　織

■卒業を迎えて

「保健婦になりたい」というただ漠然とした目標を持って入学してきた私であったが、講義や実習を通して保健婦として活動することの大変さだけでなく、楽しみや喜びを感じることができた。また、保健婦は地域住民にとても近い存在であり、個から地域全体へと自分の働きかけがつながっていくという、その役割の大きさに深く考えさせられた一年でもあった。

現在、地域社会では高齢社会・核家族化・介護保険法の導入など目まぐるしい変化が起きている。それに伴い地域住民のニーズも多様化し、住民の健康意識の上昇に伴い、保健婦に求められることも多くなった。しかし、常に地域住民一人一人を大切に考え、これまで共に過ごしてきた友達といつまでも励まし合いながら、これから保健婦・看護婦として頑張っていきたい。

（医療技術短期大学部地域看護学特別専攻　**堀川　香織**）

宝　力　朝　魯

■卒業する時の気持ち

内蒙古自治区は中国の北方地方である。冬はマイナス30℃まで気温が下がるので、地方の人達が冬になる時､牛や羊などを殺して、その肉を冬期の食肉として納屋に入れておくだけで自然にかちんかちんに凍って保存される。夏は気温がプラス30℃まで上がるのがめずらしく、しかもお昼を挟んで４、５時間ぐらい続くのが普通である。このような所に生まれ育った私は、鹿児島に来て最も生活環境が変わったという感じを受けたのが夏である。気温はプラス34℃ぐらいであるが、湿度が高いせいか、お風呂に入っているような暑さである。しかし、鹿児島大学での３年間は､先生がたと関係機関の皆さんのおかげで、猛暑にも勝って、慣れて、ほんとうに楽しい学生生活を過ごすことができた。卒業の日を目の前にして、お世話になった先生がたと関係機関の皆さんへの感謝の気持ちでいっぱいである。又、鹿児島に来たい。。

（教育学研究科2年　**宝力　朝魯**）

ノルシダ　マン

■ありがとう

私の初の来日は７年前だった。農学部生物生産学科農業システム工学の下で学んだ。２回目の来日は２年10カ月前で、農業経営経済学講座の大学院生として入学した。今回の来日は主人と一緒で、学生と妻また最近、お母さんとして多忙な日々を送っている。

７年間といわれても、長いような短いような期間であり､あっという間に過ぎていった。鹿児島大学に留学したおかげで、専門的な知識を得ただけではなく、国際親善の人間として成長することもできた気がする。

鹿児島の生活がなれたこともあって、困ったことはあまりない。言い過ぎかもしれないが、鹿児島というところは、なかなか心から離れない。なぜならば、心の温い日本人の友達、知り合い、先生達が多くここにいるからである。そこで、このチャンスを使って、“ありがとう... Terima Kasih...Thank you”という感謝の言葉を送りたい。今度もまたよろしくお願いいたします。

（農学研究科2年　**ノルシダ　マン**）

特集

退官にあたって

松本　　譲

■定年退官を迎えて

この度、定年退官を迎えることになりましたが、昭和44年に赴任して以来、早くも30年の月日が過ぎたことになります。

その間、大学紛争の火中に補導協議員として、活動家の学生に長時間監禁されたこと、ＵＣＬＡの客員研究員として比較経営論の研究にはげんだこと、学科の改組をめぐって夜遅くまで論議を重ねたこと、卒業25周年を記念して全国からゼミの卒業者が集まって、歓談に花を開かせたことなどが、なつかしく思い起こされます。

学外でも、国内外の種々の調査、行政の各種委員、テレビやラジオのコメンテーターなど、幅広い体験をすることができました。

このように学内外での充実した生活をおくることができたのは、多くの人々に恵まれたことによるのではないかと、心から感謝致しております。

今後、鹿児島大学が発展するとともに、皆様方のご健勝とご活躍を祈念しております。

（法文学部教授　松本　　譲）

山下國誥

おおば比呂司
「山下氏漫画像」1968年作
1988年没。イラストレーターとして一世を風靡した。

■宝くじ人生　２つの誤算

37年間の新聞記者生活の末、偶然に鹿大に職を得た。ここに来て、あなたの人事は宝くじの如き出来事だったんですよ、と言われた。５年４カ月の大学生活を通じて、いまその意味が痛いほど分かる。鹿大に来るに当たっては、２つの誤算があった。大学がこれを契機に、民間人材の積極的な導入に転じたと即断したこと、他は私が記者生活で積み上げたものと大学が私に求めたものとが直接的には無縁であったこと、である。無念さは独り相撲であった。が、これが国立大の宿痾の現実である。私は宝くじ人生を謳歌することに決めた。

戦前・戦後の歴史に翻弄された私は、集団としての日本人を信じないことにしている。日本人の集団主義は集団エゴと同義である。大学では加えてこれが教授会自治という名分で完璧に正統化される。個人主義社会では１人が全体を変え得る。日本では集団の３分の１以上の血が入れ替わらないと体質は変わらない。船頭多き船が、風＝外圧を求めている。

（法文学部教授　山下　國誥）

高松敬吉

■元・もと・モト

現実の社会で生きぬくのに、過去の経歴が必要なのであろう。気がかりなのが、元○○を主張する者が、少なくないからである。

私自身とて鹿児島大学へ赴任したのも老後への希望を託し「寄らば大樹」の意識を否定できない。唐の大偽に博学な香厳の弟子入りのことが思い出される。師匠が「父母未生以前」の面目を問われた。三日の徹夜で、書物を調べたが、答えはない。蔵書全冊を焼き、「画餅は餓を治せず」と吐き、借物の知識の空虚さを体得したというのである。

在職中は、四面が山の文献に押し潰される中での生活であった。この恩恵での日常が成り立っていたから感謝するのが、自然である。４月になれば、この状況からは、解放される。以前からの訣別で、勝手に振る舞うことができる。しかし、現状から判断すると、そう気安く桃源郷は、幻想であると実感したのである。

これまでの呪縛から脱皮して、元・もと・モトに依存しない平凡な生活を念願するのみ。

（法文学部教授　高松　敬吉）

荒川　　譲

■有為転変

鹿大は今秋50周年を迎えるという。制度は成熟して「新制大学」も死語と化した。だが、鹿大が年々生まれ変るのを在職36年間に実感してきた。私自身、文理学部、教養部と所属部局の廃止転換を二度も体験させられた。愛着ある図書館の旧館は私の本拠教養部と全く同時期に生まれて消えたのは偶然だが、新中央館立ち上げの責任を担うとは夢想だにしなかった。他にも組織の新増設で大学規模は拡大したが、例えば学生増は直ちに充実かと問い続けて、遂に首肯し得る解を見出せぬままである。今また大学は困難に直面している、社会的位置づけのことだ。確かに大学を社会に開くのは大切だが、批判的距離を保って社会と緊張関係になければ、知の創出・伝承という学問の営為は果されない。改革とはより良い明日を求めること、だが「競争的環境」に埋没し、「第三者評価」に囚われるあまり、大学の本質が見失われることのないよう、ただただ期待し祈るばかりである。

（法文学部教授　荒川　　譲）

特集

一　柳　宣　男

■一つの夢

退官にあたり、ささやかな『記念誌』を作成致しました。研究面などそれも読んで戴ければ嬉しく思います。学生時代、南原繁氏の御講演を聴き得ましたことが、その基盤になっていることを改めて感じさせられております。

一つの夢「数学史を算数・数学教育に生かす」こと。兄の農林学校時代の化学の教科書に、ラボアジェやメンデレーエフなどの短い伝記が載せてあり、子供心にそれが印象に残ったことと、戦前のベストセラー清水英一『数学史物語』を学生時代に古本で購入して、その記事に感動したことがそもそもの動機なのですが、夢を求めて30有余年、村田全先生、長岡亮介先生には幾たびか「数学史」の御講義に参って戴き、学生に深い感銘を与えて下さったことに謝意を表し、更なる夢の実現を将来に託したく思っております。

お世話になりました多くの方に心より感謝申し上げ、退官の挨拶と致します。

（教育学部教授　一柳　宣男）

美　坂　幸　治

■鹿大、46年目の卒業

1953年、医学進学課程入学以来、医学部、大学院（内科）、研究生、教官を含め、連続46年に亘り本学にお世話になり、やっと卒業することになりました。

郷里の先輩で遠縁の、佐藤八郎元県立医大学長、熱心にご勧誘戴いた、教室前任者の大永政人元教育学部長を始め、私淑する恩師、先輩、同僚の諸先生方、ガン、難病と闘って逝かれた、多数の患者さん達、ひたむきに学ぶ若い学徒達に多大の教えを受けました。

1972年、前身の鹿大保健診療所医師の併任辞令を頂いて以来、一時保健管理センター専任時代を含めて、退官までの27年間、学生、職員の健康管理を担当してきたことが、大学院健康管理学の開講の基礎となりました。

46年に及ぶ鹿大生活の総決算としての評価は、今後の私の、健康管理学の実践結果が決定することになりましょう。

私を教え、育てて下さった鹿大に心から御礼を申し上げ、鹿大の益々の発展を信じます。

（教育学部教授　美坂　幸治）

北　川　茂　治

■鹿大の充実・発展を祈念して

私が鹿大に赴任したのは平成５年である。東京から来た私には、鹿児島の空の色の青さと桜島の雄大な景観が深い印象として残っている。あれから６年の歳月が瞬く間に流れてしまった。光陰矢の如しの感を拭えない。

この間、平成６年の鹿大教育学部研究科の創設に加わり、後半の３年間は附属中学校の校長を務めさせていただいた。学部の授業や附属中学校の学校行事などの思い出は深い。

鹿大で、附属中学校で、本当によき同僚に恵まれた。真剣な学生や純真な生徒たちに出会った。私は同僚に対してどれだけ貢献できたか、学生や生徒たちに対する私の教育がどれほどお役に立てたか、いま振り返って反省している。

多くの先生方や職員の皆様方にはたいへんお世話になった。厚くお礼を申し上げる。大学も今や厳しい現実に直面しているが、21世紀に向けて鹿大がますます充実・発展することを心から祈念している。

（教育学部教授　北川　茂治）

東　　四　郎

■過去を振り返ってみる時

例年になく暖かい元旦を迎えた。このところの暖冬は異常であるという。天候が異常なら社会情勢も経済的にも異常で、それに毒物混入や薬品を使ったとんでもない殺人事件など社会は慌ただしく揺れ動いている。

只今、国立大学は日本国の行政改革の一環として右に左に揺れ動いている。大学の独立行政法人化の結果、一体どのような形態になるのか誰も明確な解を持ち合わせていない。不安の感拭い去れない昨今である。

そう、奉職して40余年、二度三度にわたる学部改組などなど相当長い間揺られていた。その間、大学紛争という教育の空白があり、揺れていた。最近でも教養部改廃統合という再度の揺れに翻弄された。

止まれ、その中にあって過去の実験室を思い出せ！今日の実験室は何でも整っているではないか。これが40年の歩みであろう。中央との研究環境は縮まったように思う。残るは頭脳だけ。今からの鹿児島大学は、学問の府として輝かしい未来に向け、学生も教官も一致して努力されたい。

（理学部教授　東　　四郎）

特集

米　原　範　伸

■黒板

停年にあたり、我が人生を振り返ると、その節目には常に黒板が思い浮かんでくる。前半は黒板に向かって座ることの多い人生であったが、創設草々の理学部に赴任し、後半は黒板を背にして立つことになった。32年と６月、65年間の丁度後半を鹿児島大学でお世話になり、大変多くの学生たちと出会うことができた。これからは黒板から開放された自由な人生を楽しみたいと思っている。しかし、これまでは多くの方々に支えられ、今日に到ることが出来たが、来るべき高齢化社会に向かって我が身をいかに処すべきか、「○十にして惑わず」とは言え、これからが真の惑いの年なのかもしれない。「この惑いの人生、美しくありたい」と願っている。大学にとっては「18才人口の急減」により、黒板を前にする学生の獲得が、いよいよ厳しくなろうとしている。此度の大学創立以来の大改革が実を結び、若い世代に魅力ある鹿児島大学として発展することを期待している。

（理学部教授　**米原　範伸**）

津金澤　督　雄

■停年退官にあたって

６年余を過ごした金沢を後にして、志布志経由で鹿児島まで運航されていた大阪発のサンフラワー号に乗り、七ツ島あたりの埠頭に降り立ったのは1980年９月の始めでした。一瞬たじろぐほどの強い日射しが印象的でした。以来18年、無事に責めをふさぐことができたかと思います。ちょっと気障ですが、今の心境は、「春深くして　官また満つ　日有り　帰山の情」（白楽天）といったところです。

ところで、分子生物学や遺伝子解析の進展は目覚ましく、生命の仕組みへの人為的介入による疾病治療の可能性が開かれてきています。一方、これに伴って人権や倫理に関わる問題が生じてきています。この解決に必要不可欠な医学、法学、哲学、倫理学などを包括した広い論議の展開が期待されるところです。

老害を及ぼすことのないように気をつけてこれからの人生を送りたいと思っています。

長い間ありがとうございました。鹿児島大学の益々の発展を祈念します。さようなら。

（医学部教授　**津金澤督雄**）

松　下　敏　夫

■回顧と反省

在職22年余、この度停年退職の日を迎えましたが、教育・研究・社会的サービス活動という大学人の社会的責務を、どの程度果たし得たのか？自問自答しているこの頃です。

思い出は多々ありますが、皆さんと協力して、本学と中国医科大学や湖南医科大学などとの学術交流協定を締結したことや、医学部の始祖とされる英国人医師「ウイリアム・ウイリス」の没後100年を記念して、その業績を顕彰する記念事業を成功裡に実施したことなどは、特に忘れられない事柄でした。

他方、私の専門分野に関わる環境問題で、本来、オピニオン・リーダーとなるべき大学が、地球規模の環境破壊をくい止めるための環境マネジメント・システムに関する国際規格（ISO14000）の実践などの面において、行政や住民運動の後塵を拝しているような状況は、誠に残念なことで、反省すべき事柄も多かった鹿児島大学での生活でした。

（医学部教授　**松下　敏夫**）

酒　匂　　崇

■第二の人生を前にして

本学にて約19年の教授職をこの度無事に定年退職することになりました。長い間大変お世話になりました。

定年退職を前にして色々な思いがありますが、中でも特に強く感じていることは、大学では自分の好きな研究ができて大変楽しいでした。研究は道楽と通じており、次々にやりたい事が出てきて際限のないものです。この辺で早く方向転換して別の生き甲斐を見つけなければと考えておりますが、自分にそれ程の柔軟性が残っているのか不安です。

多くの人が、定年後は、“ゴルフや写真など好きな事が毎日出来ていいですね”と慰めてくれますが、遊びばかりで過ごしてもきっと人生に飽きるのではないでしょうか。やり甲斐のあるものを見出すことは非常に難しい事ですが、これまでの長い間、大学で学んだ事を生かして、社会のお役に立ればと思っております。

（医学部教授　**酒匂　　崇**）

特集

吉　村　　望

■退官所感

昭和41年６月から32年余、鹿児島大学に在籍しました。この間、麻酔学講座の新設、医学部及び附属病院の現在地への移転、救急・集中治療棟の新営等々、私共にとって身近なハード部門の変容を目の当たりにしてきました。同時に、日進月歩の医学、医療の進歩に伴う麻酔・蘇生、集中治療医学の発展というソフトの面での素晴らしい躍進の時期を過ごせた事を幸せに感じています。とくに、私の任期中に第45回日本麻酔学会学術集会・総会を鹿児島の地で盛会裡に開催できた事は、教室員の献身的な努力に大きく負う所であります。また、附属病院長として地域に高度の医療を提供し、社会のニーズに合った臨床教育、及び研究にいささか寄与できた事を大変誇りに思っています。皆さんの努力によって、21世紀へ向けた本学のさらなる発展を心より祈念します。長い間、良き先輩、同僚、後輩に恵まれ、充実感をもって過ごせた事を心より感謝致します。

（医学部教授　吉村　　望）

平　　明

■定年退官を迎えるにあたって

光陰矢の如しというがまさにその通りである。

臨床医学は個人の死生観そのものに関連する。臨床医学の評価は左右にゆれ動き乍ら行先を模索して来た。私も折にふれ「功罪相半ばす」と思いつつ馬齢を重ねて来た。問題は我々医療、医学に従事する者がどの様な方向で認識を深めて今後複雑な世の中に受け入れられていくべきなのか。自問自答せねばならないことになる。医学教育、医師の養成、研究診療の進歩どれをとってみてもその時々の社会の要請を無視出来ない。或人は先進し、或人は遅れをとりそれぞれがその時代に適合するか否かでも評価は別れる。大学といえども臨床医は社会性を常に考慮せねばならない。医師のおかれる立場、教育のあり方、研究の方向いずれもむつかしい。多くの人々に支えられて何十年という年月を過ごすことが出来た事を改めて果報に思い、皆様にお札を述べてキャンパスを去りたい。

（医学部教授　平　　明）

大　井　好　忠

■停年という事

停年とは年を時をとめるということであり、職を退くにあたり、もう働かなくてよい、と明言されているのがよい。国立機関では退官といい、私立大学では退職という。叙勲までは位階はないので統一してもよいと思う。

60歳代は昔は本当に高齢者に見えた。今は外見は昔よりも若く見えるが、身体的に完全な若者ではない。70歳代になれば各臓器癌が発症する確率は極めて高い。人生50年では癌の発症は極めて稀であったが、60歳以降は各疾患も増加する。ゆっくり骨休めしなさいという有難い思召しが停年であろう。大学の教授ですべての事をやり遂げて悠々自適という方も少いであろう。積み残しは後輩に有益なものだけとし、負担は掛けたくない。国際的なことは止むを得ないであろう。ニューヨーク市立大学の某教授は90歳で小規模の国際会議の理事長であり、コーネル大の病理学のスチュワート教授は退官後悠々自適の生活をしておられた。どちらの生活を選ぶべきか？

（医学部教授　大井　好忠）

末　田　　武

■退官に当って

昭和55年の春、鹿児島大学に着任してから19年が経過してしまいました。この間を振り返って見ますと色々なことがありました。着任したのは歯学部が開設されて２年半経過した時であり、歯学部および附属病院の建物が完成した時でした。着任してみると部屋があるのみであり、椅子や机もなく、数日間は立ったままで過ごしたのも、今から思えばよい思い出であります。病院も大きな機材は設置されていましたが、治療用の器具はなく、リストアップから始め、やっと器具を揃えることが出来、どうにか診療科を開設することが出来ました。産みの楽しみと苦しみとを体験することができました。この19年間における科学や治療技術の進歩は大きく、そのスピードも益々早くなっているのではないかと思います。次世紀に向けてこの進歩に対応し、頑張っていただきたいと思います。在職中お世話になりました皆様に感謝し、鹿児島大学の益々のご発展をお祈り申し上げます。

（歯学部教授　末田　　武）

特集

徳　廣　育　夫

■退官を迎え

鹿児島大学に着任した昭和53年６月に宮城県沖地震があったのですが、それ以後、フィリピンルソン島地震による高級高層建物被害調査を始め、地震被害の建物との付き合いでした。４年前の阪神大災害の教訓の整理が最後の仕事と思いきや、２年前北薩地方に地震が発生し、建築物に被害をもたらし、地元と言うことで連日多忙でしたが市町村の人達から感謝され励みになりました。以前の井形学長から地域に密着した研究の重要性についての講話が座右の銘になりました。20年間の鹿児島地方裁判所でのいざこざの調停、鑑定を始め、外での仕事に明け暮れ、今となって振り返ると後ろめたさを感じます。

耐震建築の教育・研究で大学生活を過ごす事が出来たのは、不謹慎ながら地球上の何処かで地震が発生してくれたからだと思います。

最後に、気ままに仕事をさせてくれた皆様のご厚情に厚くお礼を申し上げます。

（工学部教授　徳廣　育夫）

伊　藤　士　郎

■在職100カ月

初対面の人と話をしていますと話のきっかけとして、しばしば出身は鹿児島ですかときかれます。その際、北海道生まれの北海道育ちと答えますが、縁あって鹿大工学部電気工学科（当時）に採用になったのが1990年12月ですから在職期間は丁度100カ月になります。この間学科の改組・新設、博士後期課程の発足、共通教育の問題、任期制、外部評価、独立行政法人が議論される等々、変革の時期でもあました。改組、改革の点では前の職場と同じで大学も例外ではないなと思ったものですが、トップダウンの方式を採るか否かでずいぶん違うことを知らされました。傍観者的な言い方ではありますがそれぞれの長所短所について考えさせられた100カ月でした。このような気忙しいことがらの反面よいことも大いにありました。例えば研究室に迎えた大学院生の数は１カ月当りに換算すると約１/４人、卒論生を加えると１人/月の若者から若さを分けてもらうことができました。

（工学部教授　伊藤　士郎）

田　邊　幾之助

■『移り行く時見るごとに』

昭和41年秋、通産省微生物工業技術研究所から鹿児島大学に出向して参りました。

今振り返えってみますと、最近の10年は、学科改組に明け暮れましたが、32年前の赴任後間もなくは、その後の10年にわたる大学紛争を経験することになりました。近年、周辺からその当時の記憶が薄れるとともに、この時代をともに過ごした方々も年々大学を去られ、今また、この私も大学を退くこととなりました。家持の『移り行く時見るごとに心いたく昔の人しおもほゆるかも』（万葉集巻の第二十）にも似た感慨を覚えています。この時期に至って次の大学改革の鳴動が次第に大きくなってきました。それは地域の大学が存続の意義を見出すことさえ楽観できないもののようです。鹿児島大学を心のより所とする者のためにも、後に続く人たちには敢えてそのための努力をお願いしたいのです。

最後に、私ごときを温かく遇してくださった大学の皆さんに心から感謝しています。

（農学部教授　田邊幾之助）

田　中　實　男

■大学の教育研究にひとこと

私はこのたび、42年間勤務しました当大学を停年となります。顧みるとき多くの事柄が憶い出されますが、なかでも二足の草鞋を履いてきた後めたさは中傷の言辞とともに、不快感をもって記憶を新たにする所です。

ご存知の通り、私の講座は実験系のなかの唯一の社会科学系です。実験系に配分される研究費はそのまま使えますが、私の講座では研究対象が農村・農家のため交通宿泊費が必要ですが研究費は使えず、自己負担にも限度があります。当然、条件に合致する学外機関を探しまして、昭和40年からもう一足の草鞋を見つけました。これまで400以上の経営を分析し農村へ還元すると同時に学部教育に活用し、実学的講義が出来たと自負しています。この活動に学外機関が推薦して、昨年12月に農業教育普及におおいに貢献したとのことで農林水産大臣表彰を受けました。

大学の意義が問題の昨今、実学としての学問の展開を皆様のご健康と共に祈念します。

（農学部農業経営学教授　田中　實男）

特集

関　岡　幹　尚

■あいさつ

『お早うございます。こんにちは。皆さん、朝夕の挨拶を交わしましょう』昭和61年４月、かごしま丸に着任して間もない頃、バスの車中で耳にしたアナウンスです。以来、13年の歳月が流れ、ここに、無事定年を迎えることができましたのは、練習船の乗組員の方々は言うに及ばず、陸上教官、事務官、技官、補佐員の方達の直接、間接のご協力、ご鞭撻のお陰だと、心から感謝しております。

私達が社会生活をしていくなかで、“挨拶”は、最低限のエチケットであり、コミュニケーションの出発点でもある。と、私は考えます。朝、登校途中の小学生が「お早うございます」と、挨拶をくれたり、夕方の散歩中、「お疲れ様です」と、見知らぬ方から声がかかることもあります。勿論、挨拶を返します。が、基本的には、自分の方から先に挨拶をするように心がけています。皆さん！世の中を明るくするための潤滑油、“挨拶”の輪をひろげていこうではありませんか‼

（水産学部助教授（かごしま丸機関長）　**関岡　幹尚**）

田　尻　英　雄

■夢を有りがとう

平成８(1996)年４月、ご縁があって最後の３年間を鹿児島大学で過ごすことになった。中央図書館の建設は第二期工事に入ろうとしていた。週刊A誌で報道され、全国的に余りにも有名になった鹿児島大学図書館の状況は我々仲間内でも大きな関心を呼ぶと同時にある意味での同情もあった訳だが、それも多くの方々の沢山の時間をかけた努力の結果新館の建設という形で大団円を迎え、平成９年５月に「新中央図書館開館記念式典」及び記念講演を挙行し図書館の新しいスタートを切った。最新の機能と設備を整えた図書館は一躍注目を浴び、それもひとつの引き金となり平成10年６月「第45回国立大学図書館協議会総会」の開催を担当し大学図書館の関係者等準備を含め３日間で延べ700名を鹿児島の地にむかえた。図書館職員として36年、鹿児島で過ごしたかけがえのない時間を、終生の思い出として大事にしたいと思う。鹿児島大学のご発展を心からお祈りいたします。

（附属図書館事務部長　**田尻　英雄**）

永　吉　孝　文

■惜別

月並みな言い方ですが、平成11年３月31日限りで鹿児島大学を去ることになりました。

顧みますと、東京オリンピックが開催され、東海道新幹線が東京・新大阪間に開通した昭和39年、正に日本が高度経済成長の波に乗った時期に本学に採用され、以来、34年余りの間、大学・高専で文部行政に携わってきました。在職中に印象に残る主なできごとは、大学紛争（本部封鎖・解除等）、鹿屋体育大学の創設（第1期生受入）、大学改革、そして現在進行中の事務改善合理化への取組みです。時代背景は異なっても問題解決にはその渦中で懸命に努力し智恵を絞る以外に妙案はないのでは・・・。定年後は、「公務員」という大型客船から下船して自分自身で歩かねばなりませんが、同じ一度きりの人生であるなら最後までカードを握ってゲームに参加し続けるほうが人生はより楽しく充実したものになるのかもしれません。最後に、鹿児島大学の更なる成長を祈念します。去者日疎

（工学部事務長　**永吉　孝文**）

榎　木　　實

■省みれば37年

光陰矢の如し－と言いますが、その御多分に漏れず私もいつの間にか定年を迎える歳となりました。

省みれば昭和37年鹿児島大学工学部に奉職。以後会計事務一筋の37年間。特に、昭和45年事務局経理部に配属以来、その大半を事務局に席を置き職務を遂行して参りました。学部の協力は元より、尊敬できる上司、先輩の下、良き同僚、後輩と共に常に全体的な視野を念頭に置く事や、仕事に対する厳しくも誠実な心構え等数多くを学びました。そんな中で様々な大学の変革、発展の過程を目の当たりに出来た事は、一組織人として何にも勝る貴重な経験であり、充実した職業人だったと改めて回顧せざるを得ません。

さて、21世紀に向けて。鹿児島大学の前途には数々の難題が待ち受けています。これまで我が人生を支えてくれた大学、そして皆様方の御厚情に感謝しつつ、今後益々の御発展と御健勝を心よりお祈り致します。

（水産学部事務長　**榎木　　實**）

特集

前　畑　房　代

■過去を顧みて・あの人達どうしているかな

公務員は常に国民の為の奉仕者であると言う自覚を目標に自分なりに邁進してきた私も早や退官となりますが、その間忘れる事のできない一つに70年安保の始まりとなる大学紛争の勃発一晩のうちに封鎖された仕事場も学内分散で皆苦労したものです。長期作戦に怒りもつのり或日一人の薩摩女は大切な予算帳簿等は上司の判断の基に避難させてあったとはいえ残る書類が心配で同係の先輩と窓から御忍び様子伺した時異様に積み重ねた机等の類、驚怖さなかの偵察は二階付近まで辿つくや静寂の中に余韻ある蛇口の雫尚一層の不気味さで幸い潜伏の主に出会う事なく安堵したものです。又、城明け渡しの時誰ともなく名付けたゲバ男ゲバ子達に水を撒き一蹴した事等懐古に過ぎません。今後鹿大も大改革に伴い皆様ご苦労のことと思いますが、最後に皆様方のご健康をお祈り申し上げますと共に佳き先生方、先輩後輩友達に恵まれたことに感謝し、お別れのご挨拶と致します。ありがとうございました。

（教育学部技術教育学科事務室主任　**前畑　房代**）

鳥　入　佳　輝

■定年を迎えて

昭和39年鹿大医熱帯医学研究施設名瀬研究室に採用され、一旦退職後昭和45年に再就職しはや30有余年が過ぎました。この間、大過なく無事定年を迎えることができましたのも偏に皆様方のご支援の賜と深く感謝申しあげます。フィラリア症の集団検診や「ハブトキソイド」の野外接種で奄美本島の各集落を走り廻っていた当時が懐かしく想い出されます。その熱研も昭和57年３月をもって閉鎖され医学部に配置換えとなり17年がまたたくまに過ぎ去りました。薬理学講座の福田教授他諸先生方のご指導のもと、高速液体クロマトグラフィやマーモセット（小型の猿）等を使っての実験などやりがいのある充実した日々を過ごさせて頂き感謝申しあげます。また３回の医・歯学部技術職員研修を行い、平成10年４月から技術専門官、技術専門職員が認められたのが想い出となります。これから21世紀に向かって鹿児島大学の益々の発展と皆様方のご活躍を祈念いたします。

（医学部薬理学技術専門官　**鳥入　佳輝**）

取　附　光　徳

■私の30年間

６時起床で１日が始まる。通勤時間往復２時間約60㎞を30年間走破した。事故もなく頑張ったと自負したい。錦江湾の朝日に今日の無事を祈願し雨上りの桜島の雄大な姿を視野にいれながらの通勤は少しも苦にならなかった。３回の配置替えを経験した。最初の手術部では毎日異なる手術で生きた解剖生理学を習得した。又、集中治療部では術後生死をかけた手術患者及び外傷、中毒、緊急患者等の集中治療看護を学んだ。外科病棟では術前術後の患者と家族に接し患者の喜怒哀楽の姿が目に浮かんで来る。病棟では手術の無事終了と、術後の回復、寛解された患者の退院と接することで１日の緊張感と仕事の疲れも飛んでいく。しかし、不幸にも他界された患者と家族に接した時が一番辛かった。病気の非情さに医療に従事した一人として尽くしても足りなかったことに、病魔に立腹を禁じえない。最後にスタッフとともにここまで楽しく来れたことに感謝したい。

（医学部附属病院看護士長　**取附　光徳**）

岩　下　弘　子

■定年退官を前に思うこと

長引く不況に伴って企業倒産やリストラ等の悪いニュースの多かった平成10年もようやく終り、新しい年を迎えることができた。

今年こそは希望に満ちた飛躍の年であってほしいと願わずにはいられない。又、今年は３月で32年間勤務した職場を辞することになる。これまで大過なく職責を果たすことができたのも皆様方の御協力の賜と深く感謝するものである。定年退職は「孤独」「病気」「老い」等のマイナスイメージが想像されて憂うつになるが、開きなおって人生の一つの転機として諸々の事に挑戦し、再開運へのチャンスにかえたいと思う。無趣味を貫き通してきたが、この際ウォーキングでもしながらこれからどう生きるべきかじっくり考えてみたい。世の中には生き生きと輝いている熟年達が大勢居るではないか。貴重な勤務経験と共に良き思い出を心に残してくれた「看護」の道を選んでよかったと実感している。共に支え歩んでくれた皆様、本当にありがとう。

（医学部附属病院看護婦長　**岩下　弘子**）

特集

稲　元　忠　弘

■退官にあたって

紅顔の美少年（？）であった昭和35年、初めての乗船がナポリと鹿児島市の姉妹盟約記念航海であったことを昨日のことのように思い出されます。以来かごしま丸での長期航海も若さとバカさで楽しく過ごし南星丸に配置替えされてからは、船の存在目的に合う効率のいい仕事が出来るよう努めてきました。

若さあふれる学生諸君と時代を共有してきましたが、その時その時の学生気質に驚いたり呆然としたり感動を覚えたりしたものです。

退官後は、彼等からもらったエネルギーを無駄にすることなく健康に留意して過ごしたいと思います。やりたいことは多いですが、当分は充電期間と考え悔いのない人生がおくれるよう見定めて始動するつもりです。

これまでお付き合いいただきました先輩・同僚・先生方、そして学部職員の方々に心から感謝いたします。最後に21世紀に向けて水産学部の充実と発展を心より祈念いたします。“ありがとうございました。”

（水産学部　南星丸航海士　稲元　忠弘）

○この他に以下の方々が平成11年３月31日付けで退官されます。

佐藤　榮一　（医学部　病理学第二教授）
川井田和男　（学生課　課長補佐）
松下　　尚　（附属図書館　情報管理課目録情報係長）
黒木　勝利　（医学部　管理課課長補佐）
満園　勝郎　（医学部　学務課課長補佐）
福重　一雄　（医学部　医事課専門職員）
松山　律子　（医学部　泌尿器科学事務室主任）
豊平　文子　（医学部　栄養管理室主任）
池田　建男　（医学部附属病院　材料部看護助手）
谷口　靖子　（医学部附属病院　放射線部看護婦長）
新原　節子　（医学部附属病院　手術部看護婦長）
塗木　貫一　（歯学部　業務課収入係長）
久長　勝則　（歯学部　業務課施設係主任）
田中　芳子　（歯学部附属病院　薬剤部薬剤主任）
新屋敷貞敏　（農学部　附属演習林総務係長）
盛田　泰光　（水産学部　会計係文部技官）

学内だより

守　田　和　夫

郡元地区学内交通の現状と課題

郡元地区交通委員会委員長　　守田　和夫

郡元地区交通委員会では、学内の交通安全の確保および交通に係わる環境を整備するために色々な取り組みを行っています。交通指導のため、毎日朝八時から夕方五時半まで週末を除き、門衛が交通整理を行っていますが、現状は十分とは言い難い状況です。まず、自動車の場合、現在約1900台の入構許可書を発行しています。この中には臨時入構許可書や業務関係者の許可書が約700台ほど含まれますので、これらを差し引いても駐車可能台数約1100台が満杯の状態です。加えて、夜間、土日祭日及び夏休み等になれば、一般車が我が物顔に駐車場、路上を占拠し、学内の道路上に溢れています。次に、バイクの場合、現在約1400台が駐輪場に駐車可能です。駐輪許可を得ているものは約200台に過ぎません。ところが図書館門附近の歩道では、あたかも駐輪場のごとく整然と多くのバイクが駐車しています。これは歩行者の妨げになり、道路交通法でも禁止された行為です。また、構内の乗入れは禁止されていますが、夜間に多くの二輪車が進入してきます。夏になれば、生協前のメイン道路を中心に爆音を立てて暴走行為がしばしば繰り返されています。最後に自転車ですが、現在は交通規制の対象ではありませんが、相当数の自転車が構内に乗入れられています。駐輪場のスペースの問題もありますが、建物周辺や路上等に使用者の都合で歩行者や交通の妨げになるような駐輪が頻繁に見受けられます。

郡元地区交通委員会は道路交通法による交通規制を行うためのものではなく、通勤、通学等の移動手段となる自動車、バイク、自転車を如何に整理し、学内の研究・教育環境を確保するかを目的としています。委員会では、現状の交通問題解決のために努力していますが、これらを利用する人々が自覚とモラルを持って行動すれば、解決できる問題は多々あります。しかし、現状を鑑みれば、移動手段が多少窮屈になっても、学内の研究・教育環境を確保するための新たな交通規制を検討せざるを得ない状況になってきています。今後も増大する学内の交通問題を解決するためには、先ずは皆様のご理解とご協力が必要だと考えています。

歩　道　上　の　違　法　駐　車

モ　ラ　ル　の　無　い　自　転　車　の　駐　車

随　想

野球と私

理学部　数理情報科学科　助教授　　新　森　修　一

新　森　修　一

今年のプロ野球は、横浜の連覇、西武松坂投手の活躍、長嶋巨人と野村阪神の対戦など見所が多く、一野球ファンとしては４月の開幕が待ち遠しい。ところで、私は大阪大学に10年近く勤務した後、平成８年４月に鹿児島大学に着任した。現在、姶良郡霧島町にある母校・大田小学校の野球部監督をボランティアでしていることもあり、野球との繋がりはとりわけ強く、幾つかの思い出などを話してみたい。

野球との本格的な係わりは、小学校５年生のソフトボールに始まる。当時は、ゴムマリと竹を切っただけのバットで野球（確か「デンシボール」と呼んでいた）らしき遊びを楽しんでいた。５年生の時、仲間９人でソフト同好会を勝手に作り、毎週末や放課後は空地で定期的に練習していた。教えてくれる指導者は誰もいなかったが、小学生だけで隣り町のチームとの試合に出かけたりもした。このソフトボールを通じて、野球のおもしろさに触れることができたと同時に、自分達の力だけでやり通したことへの自信や誇りを感じた。卒業後は中学校で３年間軟式野球を、高校では甲子園を一応目指して３年間、大学では神宮を目標に４年間硬式野球を、結局通算12年間野球に打込んだ。その後も草野球チームでプレーしたり、子供の入部を契機に小学校のコーチをやっていた。鹿児島への転任と同時に小学校に軟式野球同好会が結成され、一年後には軟式野球部として正式に発足した。最近の子供達は、実際にキャッチボールや遊びとして野球をすることはほとんどない。そのため、入部してくる部員はキャッチボールができない子供が大半で、勝負よりも野球の普及を狙って結成したものである。しかし、縁あって監督を引受けた以上、何とか試合に出場できるまでのレベルに到達させなくてはならないし、できたら一勝はさせてやりたい所である。指導者側の根気と忍耐の必要性を痛感している。

野球部結成直後、姶良町の小学校と練習試合をしたが、３対31、６対29のラグビー並のスコアで大敗した。国分・姶良地区は県下でも強豪揃いで、初めて対戦した小学校がその中でも伝統的に強いチームであることは露知らず、今にして思えば無謀な挑戦であった。試合後、相手の監督さんから「新チーム結成から３年間はどこと対戦しても勝てない。」と言われた。ところが、意気消沈する所かこの大敗を切っ掛けに、特に６年生の練習に対する態度が真剣になり、夏場の猛暑の中もかなりハードな練習に取組んだ。この成果が11月の合同練習試合で発揮され、第１戦で強打のチームに８対６で打ち勝ち、チーム初勝利をものにした。続く第２戦では、国分・姶良地区で１・２を争う左の好投手を相手に接戦を演じ、１対１で迎えた最終回の裏の攻撃時、２死満塁から４番のセンター前ヒットで劇的なサヨナラ勝ちをした。この勝利により、部員達も野球に対する自信がつき、また、ほとんどの保護者が応援に駆け付けていたが、非常に喜んでもらえた。

でもやはり小学生の野球で、思いもよらぬ珍プレーや好プレーが続出し、唖然としたり拍手喝采に事欠かない。ここがまた少年野球の魅力であろう。試合中、守備位置の移動を指示をするが、例えば、レフトと言っても当の本人が分からず、名前を呼んで指示しないと分からない部員が何人かいた。また、弱いチームの監督ほど試合中に大声を出す傾向にあるが、私の場合、試合中ずっと、それもメガホンを使って大声を張り上げている。ある練習試合の攻撃の時、ランナーが一塁で、相手投手の牽制球を一塁手が後逸した時のことであったが、即座にベンチから大声で「ゴー、ゴー」と吠えた。一塁ランナーはすぐに反応し二塁へスタートしたが、なんとバッターボックスに居るはずの打者までが、一塁へ向けて全力疾走していたのを見た時は驚いて開いた口が塞がらなかった。こんな珍プレー以外にも、中学生や高校生が見せるようなファインプレーがあったり、接戦で無死満塁の大ピンチにトリプルプレーをいとも簡単にやってのけたりと全く筋書きのないドラマ、目の離せない野球を見せてくれる。

野球と私の関り合い、少年野球の魅力などについて書いてきたが、今後も体力と気力の続く限り、野球と良い関係を持ち続けたい。

今世紀最後の年の、「初夢」

補導協議会委員　農学部　教授　　坂　田　祐　介

坂　田　祐　介

人が「ひと」らしく生きるための条件の一つとして、「キラキラ感覚」が必要である。この感覚は、感性の問題である。少女マンガに描かれている世界、例えば、『キャンディキャンディ』の感覚の世界である。あるいは『赤毛のアン』のアン・シャーリーの世界でもいい。色々な出来事や様々な人に出会う。その時の「ハラハラ・ドキドキ・ワクワク」する感覚とでも言おうか、疎外された立場とまったく逆の局面の、それが、「キラキラ感覚」の世界で、感性に満ち溢れている。

３歳の娘の手を引いて月夜に散歩した。すると娘は突然立ち止まり、空を見上げ満月を指さし、大きな声で「おちゅきしゃま！」「まんまるー！」と言いながら、大きな眼を見開きジッと見つめる。これが「キラキラ感覚」で、「ひと」としての感性と言ってよい。

人は社会化や文化化の過程で、家庭教育、学校教育、社会教育などの様々な教育を受けるが、その中で残念なことにこの種の感性を失っていく。例えば、満月については、小学校高学年になると、「お母さん、満月よ。きれいよ。チョット見て！」となる。20歳近くになると、「あら、満月だったの？今日は？」となり、やがて35歳を過ぎると、「エッ、月、出てた？」に落ちつく。これを「感性の磨滅のプロセス」といい、徐々にハラハラ・ドキドキ・ワクワクしなくなる。

「ひと」と「ひと」との関係を成立させる上で最も大事なポイントは、無理に「理解しあう関係」ではなく、互いに感じ合あう「共感関係」である。夫婦、親子、友達、教師と生徒の関係を問わず、あることを見聞きし、同じように喜び、悲しみ、怒る関係である。この共感関係が成り立つには「ひと」の持つ感性しかなく、キラキラ感覚の乏しい人は、他の「ひと」との共感関係は生まれ難い。

哲学者の三木清は、「邂逅」という言葉を好んで使い、自己の恵まれた邂逅を一生の幸せと感謝したという。彼の言う邂逅とは単に途上で行き会うことではなく、呼びかけに応える運命的な出会いである。例えば、人の一生を円に置き換えると、無数に存在する円のうち、極めて少数が自分の円と同心円をなす場合がある。この同心円の関係を「ひと」と「ひと」との邂逅とし、共感関係がそれを築きあげるという。

「大学における邂逅」、「友人や教師との運命的な出会い」、「呼応する共感関係」、「豊かな感性」、等々のキーワードに関して、キャンパスの学生諸君を俯瞰すると、漠然とではあるが、何かが欠落し、何となくギクシャクしており、少し不自然で、やや不透明な感がするのを否めない。ちょうど、精密機器の組立てに当たって、どこか判らないが主要なネジが一本だけ弛んでいるようなもので、そのために機器が正常に動いてくれない感じでもある。

機器の不作動はオーバーホールで解消できる。しかし、学生諸君にある「モヤモヤ感覚」を払拭するには、オーバーホールは手間がかかり過ぎる。下手をすると修復不可能になる場合だってある。

補導協議会委員を拝命してはや一年。錆びつつある学生諸君の感性に眠る「キラキラ感覚」に注油する教育と、教育環境の整備を急がねば！　「邂逅」できる場を与えねば！・・・・ここで目が覚めた。

今世紀最後の年の、私の初夢の一部始終。

対人恐怖症

保健管理センター　助教授　　森　岡　洋　史

森　岡　洋　史

対人恐怖症は、欧米に比べて日本に非常に多い神経症だと言われています。他人を気にするこの神経症は、確かに自己主張の強い欧米人に比べて、公の場面で控えめに振る舞い、何事も横並びを良しとし、目立たないように気をつける傾向がある日本人に親和性があるようです。特に思春期は、理想の自己と現実の自己との間に乖離が起こり、自分の容姿や性格などを他人と比較して自己否定的になり易いことから、この時期に最も発病の危険が潜んでいるといえます。

その中で一番軽症で、誰もがよく知っているのが赤面恐怖症でしょう。これは、何か公の場で発言した際、些細な失敗をし赤面したことがきっかけとなって、以後人前で顔が赤くなることを異常に気にするようになる病態です。その他に、やや重症なものとして、他人や自分の視線が気になる視線恐怖症、自分から何か変な臭いが出ていてそれが人に気づかれるのではないかと心配する自己臭恐怖症、自分の顔、例えば目や鼻の形など些細な容姿の欠点が異常に気になる醜形恐怖症などがあり、これらを総称して対人恐怖症といいます。

これらの病態に共通にみられる特徴は、まず、何らかの対人場面における自己の欠点の存在があるということ、そして、その欠点が人に知られているということを、他人のちょっとした仕種（例えば、他人が咳払いをしたとか、目をそらしたとかいったこと）で確信していく心理構造があること、さらに、自分が友だちの輪のなかに入っていくと雰囲気を壊してしまうという確信から、他人が自分を避けるという妄想を持ちやすいということなどです。このような症状のために、この人は集団という対人場面に溶け込んで自由に振る舞うことができず、徐々に自分の殻にとじこもるようになってしまいます。ところが、この悩みは誰にも話さないことが多く、また、一見して悩みがあるようには見えないため、周りの人、例えば家族でさえ全く気がつかないのがほとんどで、こうしたことから多くは14、５歳ころから悩みはじめるものの、思い余って精神科や心理関係の機関に相談に来る時は既に発病してから５年以上たっていることが多いのです。

このように、すっかり症状が固定してしまってから受診してくるため、治療はなかなか難しい場合が多く、また、病気自体が頑固な劣等感に根ざしている性質上、何か自分が得意な分野で他人に高く評価されるといった体験でもない限り、なかなか症状改善のきっかけがつかめません。

それでも、そこはよくしたもので、たまには重症化していくケースもありますが、年齢も30歳くらいになると、自然と対人恐怖を克服していく人が多いようです。このくらいの年齢になると、人間みなずうずうしくなるせいでしょうか、あるいは、結婚をし、子供を持つ頃ですので、機会に恵まれた人はその経験が対人緊張を和らげてくれるといったことも考えられるかもしれません。

ともあれ、他人からどう思われているかばかりが気になり、グループに溶け込めず、何をするにも自信がなく、ゆううつで、ものごとに熱中できずに１人で悩んでいる人、あなたは対人恐怖症です。一度相談においでください。

（神経精神医学）

留学生日記

Learned From Japanese

工学研究科2年　　ディナル　チャトル　イスティヤント（インドネシア）

ディナル　チャトル　イスティヤント

I came to Japan for the first time in 1992 for three months intensive training regarding my major in Port and Harbor Research Institute, Yokohama. For a glance I experienced by my self "what is Japan". I saw at that time that Japan is advance in wide field of technologies, rich, country with excellent system of transportation reaching even until remote areas.

Three months passed very fast and I had to going back to my homeland. However, good experiences left in my mind is encouraging me to seek for a chance to return back to Japan. By the willing of God, I succeed getting Monbusho scholarship in 1994.

Now, almost 5 years I am studying in Japan. Again, I am experiencing Japan, but in more wide angle, during more long term. Too many things need to be said,but let me tell you some few of them only, in my own simple way. May you learn from them too.

I want to say that each nation actually has their best sides as well as the worst sites. As well Japan. However, what I learned, not every nations are able to realize their situation. The Japanese, from my point of view, they are exploring, exploiting, and enhancing even a small merit they have, and along with this, they are trying to diminish their lacks as handicaps.

I am trying to draw one plain example. I imagined that I will involve in a well-equipped laboratory when I started my graduate course. Why not? This must be a normal condition for universities in rich and developed country like Japan. But, instead, I had been startled that our laboratory experiment facilities in my country is better than here. A moment after, a question is rise. How can they be productive in generating many applied engineering technologies, by only limited facilities? A few moments later, after a little talk, I guessed something. Actually the complete and excellent the equipment, the greater the chance to reach the best. Nevertheless, equipment does not mean everything. The most important is how the optimum result can be gained by the limited facilities. Working is by mind, while facilities are supporters only. No reason to stop the works because merely limited facilities. Oppositely, no results will produce without mind, although by well-equipped laboratory. That is the spirit.

Maybe this is not an appropriate example. But at least this is what I learned by my personal understanding.

Life and Experiences in Kagoshima

農学研究科1年　　サルバドール　アービン（フィリピン）

サルバドール　アービン

When I first came to Japan I was really surprised by almost everything, the weather, the city, the culture, the people and also the language. Japan was a whole new country for me, and I began comparing everything, from the way Japanese people dress to the prices of the cabbages at Taiyo, and I thought it would be difficult for me to adjust. But shortly after a few weeks I was astound by the kindness of the Japanese particularly in Kagoshima that I didn't have much problem adjusting (except for the language). Also I have learned how to accept and respect their culture and refrain from making an analogy with my country, then before I knew it things were not that different after all.

As of now I am in my first year of my masters degree, specializing in food chemistry, at the Department of Biochemical Science and Technology at the Faculty of Agriculture. In my laboratory, I have learned so much, not only science but also relationship with my laboratory mates. In as much as they taught me the Japanese of some English words like toketsu kanso (freeze dry), shiyaku bin (reagent bottle) and others, I also try to teach them some English words that I knew. In addition to that we have very supportive professors, Dr. Takayoshi Aoki, Dr. Yasushi Sugimoto and Dr. Hisham R. Ibrahim, who are guiding us and giving us advises in our respective researches. As I have said earlier I am still in my first year, it means I still have another year to finish my course, to do experiment, encounter problems, adjusting to the new 4th year students (which is going to be my 3rd time) and of course having fun.

Kagoshima is one of the most peaceful and hospitable places that I have been to. I am sure all foreign students like me in Kagoshima are very lucky and thankful that they have the chance to live, witness the culture, interact with the people, become professionals, eat soba and raw fish and of course drink tea. Some of us may not know it but Kagoshima had a big effect on what we will be in the future.

In behalf of my wife Lorena (who is also a student in Kagoshima Daigaku), I would like to express my sincerest gratitude for giving me this opportunity. And to all my fellow foreign students, I wish you good luck!

環境情報科学講座

水産学部　水産学科　教授　　市　川　　洋

市　川　　洋

1998年は、ユネスコの政府間海洋学委員会が提唱して国連が定めた、「地球上のすべての生命の源であり、人類繁栄の礎でもある海洋の大切さについて広く理解を深めることにより、海洋環境を守ること」を目的とした「国際海洋年」でした。ここで「海洋環境」とは、広義には、海水の運動（流れ）、海水によって運ばれる熱量（水温）および塩分・酸素・栄養塩・微量重金属類等の化学物質と、海中に棲息する微生物・プランクトンから大型資源魚類までの各種生物の分布状況を表しています。私達の講座は、本学の中で、工学部海洋土木工学科環境システム工学講座とともに、この「国際海洋年」事業と最も関連のある研究組織の１つと言って良いでしょう。

相互に複雑に関連する種々の変動要因によって絶えず変動を繰り返している海洋環境に関わる諸問題の解決のためには、何よりも現実の海洋環境がどうなっているのかを計測し、得られた情報を適切に処理することが必要です。このため、1998年度の私達の講座は、以下の４つの小グループに分かれて海洋環境情報に関わる研究を行っています。それらは、海洋環境とその変動の実態の解明に迫る「海洋環境グループ（教官３名）」、実験室で得た流れの可視化画像や人工衛星による海面熱赤外画像等の画像情報の解析を進める「海洋情報グループ（教官２名）」、漁船に搭載されている航海計測機器から得られる水中騒音・音響等の情報の漁業資源調査への利用技術を開発する「航海情報グループ（教官３名）」、海洋観測を担う船舶や海洋水産資源の管理・育成のための浮体構造物の性能評価手法を開発する「浮体情報グループ（教官３名）」です。

鹿児島県は、世界の主な漁場の１つである東シナ海に面しています。また、世界有数の海流である黒潮が県内のトカラ海峡を通って東シナ海から太平洋へ流出しています。黒潮の強さは北太平洋上を吹く風の数年～数十年周期の変動に応じて変化します。この黒潮の強さの変化に伴って、日本南岸では黒潮の流路が大きく変化し、東シナ海では水温・塩分などの分布が変化します。さらに、この変化が漁業資源量や漁場の変動を引き起こしています。逆に、黒潮によって北の海へ運ばれる熱量の長期変動によって地球規模の大気大循環の長期変動が生じます。また、中国大陸を起源とする河川水は東シナ海を経て、世界中の海へ広がります。このように、黒潮変動および東シナ海の環境変動は地球規模の環境変動と密接に関わっていると考えられています。しかし、これらの変動のメカニズムについては、我々はそのほんの一部分しか分かっていないのが現状です。このため、私が属する「海洋環境グループ」では、鹿児島湾の海水流動構造や赤潮発生要因などの沿岸域の海洋環境に関わる研究のみならず、本学部附属練習船「敬天丸」および国内外の研究機関と協同して、東シナ海における水塊分布機構と漁場形成機能、黒潮の変動機構と気候変動に果たす役割などに関する研究を進めています。鹿児島の地理的特徴と鹿児島大学が現有する施設を生かしたこれらの地域的研究を通して、私たちは地球規模の環境変動機構の研究に貢献しています。

敬天丸船上での流速計設置作業の様子

サークル紹介

学友会管弦楽団

法文学部　人文学科3年　**大川　洋人**

私たち鹿児島大学学友会管弦楽団は1952年に結成された鹿児島大学とその他の大学の学生など約90人からなるアマチュア・オーケストラです。

年間の主な活動は、年に２回夏と冬に行っている定期演奏会、夏期休暇を利用した鹿児島県内各地での音楽鑑賞会、学内外での式典演奏等も行っています。楽団の育成にあたっては、当楽団の部長である教育学部音楽科の長谷川勉教授の指導を仰ぐ一方、学外より東京シティ・フィルハーモニック管弦楽団創立桂冠指揮者堤俊作氏をはじめ多くのベテラン・若手指揮者に客演をお願いし、音楽的、技術的向上を図っています。

今年度は6月の第61回定期演奏会においてドヴォルザークの交響曲第9番「新世界より」、2月の第62回定期演奏会ではチャイコスキーの交響曲第6番「悲愴」などを演奏し、好評をはくしました。７月には川薩地区のホールや小学校でふれあいコンサートなどの音楽鑑賞会を行いました。

クラシックというと堅苦しいイメージがあるかもしれませんが、そんなことはありません。また、うちの団員はほとんどが初心者です。ちょっと楽器をさわってみたいというあなた、いつでもオケに。また、今年の6月に第63回定期演奏会を行います。どうぞいらしてください。団員一同お待ちしています。

第　61　回　定　期　演　奏　会

学友会陸上競技部

法文学部　法学科３年　**下田　健治**

陸上競技は、0.1秒もしくは１㎝を争うスポーツです。力の差は記録という形ではっきりと示されます。記録の向上には、技術の修得のみならず、身体能力の発達・精神面の強化といったことも非常に重要です。練習は、肉体の限界まで追い込むような苛酷な内容が多いですが、それだけに自己新記録が出たり入賞できたりしたときの喜びは格別です。またリレーや駅伝といった団体競技は、個人種目にはない感動とドラマがあります。

鹿大陸上競技部は現在51人の部員が所属し、種目に応じて短距離走・長距離走・フィールド競技の３つのブロックに分かれて活動しています。練習は主に授業後グラウンドで行いますが、照明のおかげで日没後も集中して練習に励むことができます。

昨シーズンは、５月の九州インカレで男女とも総合４位になったのを皮切りに、個人では女子800mの柳田しげ子さんが日本学生種目別対抗選手権大会で見事優勝し学長表彰第一号を授賞し、男子砲丸投げの川崎正法君は、１年生ながら日本選手権ジュニアで準優勝を遂げました。その他にも厳しい標準記録を突破して５人が全日本インカレに出場したり男子400mリレーが日本選手権リレーに出場したりと、少しずつ全国レベルの大会に手が届くようになってきました。

今、部員達はすでに来シーズンに向けて走り込みや筋トレなどに励んでいます。

来シーズンの私達の活躍を御期待下さい。

第16回九州学生駅伝対校選手権大会（於：島原市）

新任教官紹介

平成10年７月１日から平成10年11月30日までの間に就任された教官（講師以上）は次のとおりです。

榎股　一索（えのまた　いっさく）　（法文学部助教授経済情報学科）
修士（経済学）

（生）昭和42年８月17日
（学）名古屋大学大学院経済学研究科博士課程（前期課程）
（前）中部大学国際関係学部非常勤講師
（担）世界経済史

中南米の経済史を研究しております。学生諸君との交流を通じ、何か新しいものを生み出す授業を造ってゆきたいと考えております。

井原　慶一郎（いはら　けいいちろう）　（法文学部講師経済情報学科）
博士（文学）

（生）昭和44年11月23日
（学）広島大学大学院文学研究科博士課程
（前）広島大学大学院生（福山大学非常勤講師、尾道看護学校非常勤講師）
（担）英語（共通教育）、英語圏社会事情、外国書講読（英語）、国際カルチャー

鹿大生に知的刺激を与えられるよう、教育・研究に励みたいと思います。どうぞよろしくお願いします。

北村　浩一（きたむら　こういち）　（法文学部講師経済情報学科）
修士（経済学）

（生）昭和47年１月17日
（学）九州大学大学院経済学研究科修士課程
（前）なし（九州大学大学院経済学研究科博士後期課程学生）
（担）管理会計論、原価計算論、会計情報論

研究、そして教育に精力的に取り組み、様々な形で貢献していきたいと思っています。

狩野　浩二（かりの　こうじ）　（教育学部講師学校教育講座）
修士（教育学）

（生）昭和39年11月３日
（学）宮城教育大学大学院教育学研究科修士課程
（前）沖縄国際大学文学部
（担）教育方法学

11月に沖縄からきました。私のモットーは、勉強と遊びを区別しないということです。みなさんどうぞよろしくお願いいたします。

生野　桂子（しょうの　けいこ）　（教育学部助教授家政教育講座）
修士（教育学）

（生）昭和27年11月27日
（学）福岡教育大学大学院教育学研究科家政教育専攻修士課程
（前）西南学院大学講師
（担）家庭科教育　家庭経営

家庭科教育、家庭経営担当です。新学習指導要領にある「生きる力」を育むような家庭科のあり方を追究する教師養成が目標です。

廣井　政彦（ひろい　まさひこ）　（理学部助教授物理科学科）
博士（理学）

（生）昭和36年８月13日
（学）京都大学大学院理学研究科博士後期課程修了
（前）東北大学助手金属材料研究所
（担）電気と磁気の現象、電磁気学

新しい土地で新たな方面を切り開いていけるように、教育・研究に取り組んでいきたいと思います。

しまだ　かずゆき
島田　和幸　（歯学部教授口腔解剖学Ⅱ講座）
歯学博士、博士（医学）

（生）昭和24年１月３日
（学）日本大学大学院歯学研究科博士課程
（前）昭和大学医学部助教授
（担）解剖学（肉眼解剖）、歯の解剖学

肉眼解剖を通じて人体構造のすばらしさの認識と医療人としての人間形成の場になるような教育、肉眼解剖学の後継者の育成を行いたい。

ほんま　としお
本間　俊雄　（工学部助教授建築学科）
工学博士

（生）昭和30年８月５日
（学）日本大学大学院理工学研究科（博士課程）海洋建築工学専攻修了
（前）株式会社フジタ技術研究所主任研究員
（担）応用数学、建築構造シミュレーション

生活圏を関東から九州に、所属を民間企業から大学へと激変。しかし、計算力学と建築を橋渡しする研究・教育には変わらず驀進します。

よしもと　みのる
吉本　稔　（工学部助教授生体工学科）
博士（理学）

（生）昭和39年６月14日
（学）名古屋大学大学院理学研究科化学専攻博士後期課程修了
（前）工業技術院物質工学工業技術研究所研究員
（担）生物電気化学、生体情報システム論Ⅰ、Ⅱ　複雑系情報システム特論

鹿児島大学の環境に慣れてきたところです。生体工学の先生方と特色ある研究を展開していきたいと考えています。

やまもと　まさし
山本　雅史　（農学部助教授生物生産学科）
博士(農学)

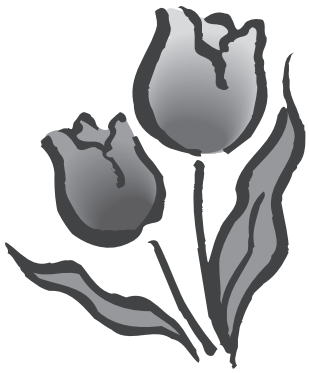
（生）昭和39年１月27日
（学）京都府立大学農学部農学科
（前）農林水産省果樹試験場育種部主任研究官
（担）園芸環境論、農場実習、果樹園芸学特論

暖地である鹿児島の特徴をいかした農業研究及び教育を進めたいと考えています。

バスケス　アーチディル　ミゲル　フェデリコ
VAZQUEZ ARCHDALE MIGUEL FEDERICO
修士（水産学）（水産学部講師漁業基礎工学講座）

（生）昭和37年９月29日
（学）鹿児島大学大学院水産学研究科修士課程
（前）ディスカス・ランゲージ・スクール講師
（担）漁業基礎工学講座

留学生との交流を通して、日本の国際化に貢献できるよう努力していきたい。また、自分の水産学についての研究も深めていきたい。



図書館だより

「文献検索ＤＢ」の利用がしやすくなりました

附属図書館　中野　里香

今までは、附属図書館の一部のパソコンと特定の研究室のパソコン等での利用に限られていた文献検索のデーターベースが、簡単に附属図書館のホームページ上で、利用できるようになりました。

新しく利用可能になった文献検索のデータベース名は、次の通りです。

・医学中央雑誌　（国内の医学関係の雑誌）
1987年－最新版
・雑誌記事索引　（国内の主な雑誌）
1990年－最新版
・ABI/INFORM　（経営学に関する洋雑誌）
1986年－1991年

これらのデータベースは現在のところ「Windows95・WindowsNT」で、利用できます。利用方法につきましては、初回のみ各データベースの検索ソフトのダウンロードが必要となります。設定方法をよくお読みの上、検索ソフトのインストールを行って下さい。

これらのデータベースを含めて図書館のホームページには、教育・研究に必要な論文や図書を探すのに役立つ情報が数多く掲載されておりますので、ぜひお役立て下さい。

なお、必要な論文、図書が学内に所蔵しているかどうかホームページで調べて学内に無ければ他の機関に依頼しますので、参考調査係まで申込み下さい。そして申込み方法については、ホームページのリクエストサービス及びレファレンスカウンターの用紙いづれかをご利用ください。

＊注意　ユーザー数に制限有り

附属図書館のホームページのアドレス
http://www.lib.kagoshima-u.ac.jp
（鹿大のHPから入ることもできます）

＊問合せ先
参考調査係（ダイヤルイン285-7440）
sanko@libws1.lib.kagoshima-u.ac.jp

■編集後記

本号の編集は「未来への道」と題して、卒業・退官の特集を組みました。巣立ち行く卒業生、多年に渡り本学に貢献された教官、事務官、技官の方々に、各位の抱負を記して頂き、「未来への道」を託してくださるよう編集致しました。

過去の「特集」のテーマを、遡りますと「飛翔」、「さあ、つぎのステップへ」、「新しい世界へ」、「門出」、「巣立ち」、「息吹」、「芽生え」、「旅立ち」など、そして「Bon voyage」さらには「Ergrobibamus（さらば飲もう）など、として編集されています。検討の結果「未来への道」と致しましたが、「超氷河期」あるいは「経済社会の第二の敗戦期」から抜け出して「変化の胎動」を触感しながら、各位の「未来への道」が洋々と展開されんことを、編集子一同は祈願しております。

（法文学部　　別府　三郎）

■広報委員会委員

○別府三郎（委員長・評議会）　小田　紘（評議会）　○山下　晋（補導協議会）　北村良介（共通教育委員会）　石川英昭（法文）　池川　直（教育）　○中島正治（理）　○榮鶴義人（医）　北野元生（歯）　○福原　稔（工）　田代正一（農）　○安藤清一（水）　○　田博文（医短）
（○印は第149 号の編集委員）

●鹿大広報　第149号
平成11年２月22日発行
●編集・発行
鹿児島大学広報委員会
住所：鹿児島市郡元１丁目21番24号
電話・FAX：099-285-7035・7034
印刷：斯文堂（株）